

建皇子についての覚書(3)

松延秀一(京都大学)

建の母は遠智娘(おちのいらつめ)である。それで問題ないはずであるが、いろいろ疑問とする見解もあるので、それらを紹介しつつ再考してみたい。

まず、史料である日本書紀の記載を確認することから始めよう。岩波文庫版による。

天智紀七(668)年二月の条にこうある。

蘇我山田石川麻呂大臣の女あり、遠智娘と曰ふ。

[或本に云はく、美濃津子娘(みのつこのいらつめ)といふ。]

一の男・二の女を生めり。其の一を大田皇女と曰す。其の二を鷗野皇女(うののひめみこ)と曰す(後の持統)。・・(中略)・・其の三を建皇子と曰す。唾にして語(まこと)とふこと能はず。

[或本に云はく、遠智娘、一の男・二の女を生めり。其の一を建皇子と曰す。其の二を大田皇女と曰す。其の三を鷗野皇女と曰すといふ。]

[或本に云はく、蘇我山田麻呂大臣の女を茅渟娘(ちぬのいらつめ)と曰ふ。大田皇女と娑羅羅皇女(さららのひめみこ)を生めりといふ。]

建が唾だったということ、母が遠智娘であることは、いずれも本文記載事項であるから、その限りでは問題はないであろう。ところで、ここでの「或本」の記載つまり別伝というのは、本来なら傍証というか状況証拠として本文を裏付けるものでなければならぬが、ここではどうだろうか。

引用中の最初の或本は、遠智娘には別名が

あって、美濃津子娘であると紹介している。卷三十の持統称制前紀にも、(持統の)「母を遠智娘と曰す。更(また)の名は美濃津子娘」とあり、遠智娘には名前が二つ伝わっていたことは間違いない。ところが、美濃津子娘に関する岩波文庫の注釈では、「造(ミヤッコ)→御(美)野津子→美濃津子と、宛てた字が変わったか」としている。察するに、書写が繰り返されるなかで「造」が「御野」という漢字に置き換えられ、そのヨミが「ヤ」から「ノ」に変わり、「野」から「濃」に変わった、ということなのだろう。

実は、遠智娘の部分にも注釈があって、「蘇我造媛と同人であろう」としている。この二つの注釈で、岩波文庫版では遠智娘・美濃津子娘・造媛を同一人とみなしていることがわかる(造媛については後述)。

その次の或本は、三人の子どもの記載順が変わっている。注釈では、「本文は誕生の順。この本は男女の順か」としており、これは妥当であろう。

最後の或本は茅渟娘の紹介である。子供の名が本文とは微妙に違っているが、茅渟娘は遠智娘の別名なのであろう。注釈もそのように推定しており、「未詳」としている。娑羅羅皇女は鷗野皇女と同一人物である。卷三十の持統称制前紀には、「(持統の)少(わかき)ときの名は鷗野讚良皇女(うののさららのひめみこ)とまうす」とある。この或本には建の名がでてこない。素直に受け止めるとすれば、

この或本は遠智が建を生む前の名を伝えたものと解釈することになるだろう。

そうすると、茅渟娘の名は、時期的に建出産前までのもので、それ以後は、遠智娘と美濃津子娘の二つの名を持っていた、とするのが素直な理解となるだろう。もっとも、三つも名前が伝わっていたのかと疑問を呈する見解もある(中村修也「偽りの大化改新」講談社現代新書, 2006.6. p. 162)。

さて、造媛(みゃっこひめ)である。岩波文庫の注釈のように、遠智娘と同一人物とみなす見解が通説らしい。

造媛の名が出てくるのは、孝徳紀大化五年(649年)三月のところである。

皇太子(中大兄)妃蘇我造媛、父の大臣、塩の為に斬らると聞いて、心を傷(やぶ)りて痛み惋(あつか)ふ。(中略)造媛、遂に心を傷るに因りて、死ぬるに致りぬ。・・・

造媛は、父の死に衝撃を受けて死亡したが(この事件の詳細は本稿では省略)、この記事は649年のところにある。造媛の死がいつかについての記載はないものの、649年に死んだであろうということになっている。

一方、建の出生と死の年については、651・658年ということになっている。そうすると、もし岩波文庫注釈のように造媛と遠智娘が同一人物としたならば、649年に死んだ人が651年に建を出産した、というつじつまの合わないことが生じる。これについては、既に先学の指摘がある。上田正昭氏は「古代日本の女帝」(講談社学術文庫, 1996.2)の中でこのように述べる。

二年前に死んだはずの人が子を生むといったまったくつじつまがあわない話にな

る。私が滑稽な矛盾といったのはそのためである。(p. 140)

とし、三つの解釈案を提示する。一つ目は、造媛の没年は誤り。二つ目は遠智娘ではなく他の妃が建を生んだ。三つ目は、蘇我倉山田石川麻呂の娘の姪娘(めいのいらつめ)が造媛であった。以上の三つのうち、上田氏は造媛と遠智娘を同一人物とみなしたうえで、二つ目、つまり他の妃が建を生んだとするのが合理的であろう、とした。しかしこれは本文記載と矛盾する。

また、山本正志氏は「ことばに障害がある人の歴史をさぐる」(文理閣, 2005.11)のなかでこう述べる。

没年は明記されていません。ただ事件直後六四九年に亡くなったのでは計算上タケルノミコが生まれることができませんから、事件から二年経ってタケルノミコが生まれた年に、母は亡くなったのではないかと推測します。(p. 49)

これは上田氏の提示する第一の解釈に当たる。計算が合わないから649年に死んだのではなかろう、というわけである。しかし、「推測」、ということであり、上田氏が批判するように、「それには何の論拠もない。」

では、造媛と遠智娘を同一人物とする説は実証されているのだろうか。岩波文庫注釈では、前述のように当て字の変化があったのであろうとしているが、どうも思いつきのようで、どこかに根拠があるわけでもない。

一方、別人説も存在する。当方の知る限りでは、例えば、中西進、中村修也、居駒永幸の各氏である。中村氏は前述書の中で、中西氏の「天智伝」(中央公論社, 1975)から別人である、とする部分を引用する。

しかし、造媛はここに没し、遠智媛は後にも建王を生む。別人である。(p. 96)

こちらのほうが辻褃は合う、とする(中村前掲書, p. 159)。居駒氏も宛て字の変化だけでは根拠が弱いとし、別人であった可能性が強い、とする(「古代の歌と叙事文芸史」笠間書院, 2003.3. p. 258)。注釈にこだわらずに素直に読むなら、別人とするほうが、すっきり解釈できるであろう。

つまり、別人ということであれば、本文記載どおり建の母は遠智娘であるとしてよいのである。造媛は子どもを持つことなく、父の死による精神的衝撃で死亡した。であるから、造媛の死と建の出生とをむりやり結びつける必要はない。

とは言え、妹である遠智娘のほうも父の死で精神に動揺をきたしたであろうし、そのため、たとえ二年後の出産であっても、周産期環境はよくなかったとする山本氏の想像は当たっているであろう(p. 49-50)。しかしそもそも書紀に唾の原因が書かれていない以上、原因については想像の域を出ることはなく、「その障害がどのようなものだったのかは、詳しくは分かりませんでした」(山本前掲書, p. 56)とするほかはないのであって、どのような唾であったかということにこだわることは生産的ではあるまい。

ところで、建はどこで生まれたのか。出生年の651年は白雉二年、孝徳朝期であり、都は大化元(645)年十二月に難波つまり現在の大阪市に遷っていた。建は大阪生まれの王族だったわけである。しかし建の難波暮らしは足掛け三年で終わる。書紀の白雉四年是歳条にこうある。

太子(中大兄)、奏請(まう)して曰(まう)さく、「冀(ねが)はくは、倭(やまと)の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち、皇祖母尊(すめみおやのみこと = 皇極)・間人皇后(はしひとのきさき)を奉り、并(あわせ)て、皇弟(すめいろど)等を率て、往きて倭飛鳥河辺行宮(やまとのあすかかわらのかりみや)に居(ま)します。

白雉四年すなわち653年に、孝徳と中大兄(または皇極)との間に何らかの対立が生じ、中大兄が孝徳の制止を振り切って、皇極はじめ一族を引き連れて飛鳥へ戻る事件が起きた。この事件の真相は不明のところが多いが、これ以後、建は飛鳥で暮らすことになる。

翌654年に孝徳が死去、皇極が再び即位(重祚)して斉明の時代に移り、都は飛鳥へ戻った。そして斉明は飛鳥で「狂心(たぶれころ)の渠(みぞ)」と揶揄されるほどの大土木工事を進めた。今日飛鳥に残る謎の石造物の多くはこの頃のものである。

幼いうえに思うように話ができない建の眼に、土木工事を指揮する祖母の姿がどのように映ったかはわからない。中大兄の嫡男であるから「大切に育てられた」(山本前掲書, p. 52,56)であろう。しかしながら、これ以後の建の成長についてあれこれ憶測を述べるのは想像の世界のこととなる。